

NEJIREBANE, No. 85, 15. Dec., 1999

林 匡夫先生の死を悼む

黒田祐一

先生にお目にかかったのは、大林一夫先生(当時岐阜県在住のカミキリムシ研究家)にご紹介され、昭和19年(1944)に大阪平野町のお宅を訪問したのが初めてである。袋物屋の店先で、和服に前掛姿でお客の相手をされておられるのがご本人と知り、一瞬驚いたのが印象に残っている。その年、関西昆虫学会報に「本邦産ニセハムシハナカミキリ属に就いて」の論文を発表されるなど、既にその後の多量の業績が始まっていたのである。

その頃まだ新幹線は開通しておらず、林・大林両家の訪問には、まず林先生宅に一泊し、翌朝奥さんの手弁当を頂いて大林先生宅へ、又はその反対のコースで年に何度かお邪魔した。物資の不自由な時代に、カミキリ好きというだけで、嫌な顔もされず奥様共々お世話頂いたり、昭和20年岡山市の空襲で我家が被災した時には、文献・標本に両先生より物心共にご援助頂いたのを、感謝の気持で何時も思い出す。

戦後暫らく倉敷にいた時、大原農研(現在岡山大学附属図書館)にある文献の複写をよく頼まれた。その時代コピー機は無く、タイプ用紙も手に入らなかった。その為、当時新聞記者をしておられた大林先生より原稿用紙が届けられ、友人にタイプライターを借りて、印字の勉強をしながらキーを叩いたのも懐かしい思い出である。

昭和30年(1955)に「原色日本甲虫図鑑(上)甲虫篇」を出され、昭和36年には、ヒメハナカミキリの論文で北大農学部より農学博士の学位を授与された。

昭和39年、大阪城南女子短期大学の教授に迎えられたが、この年に大林先生が亡くなられた。

昭和44年に「原色日本昆虫生態図鑑カミキリ篇」を、昭和59年に「原色日本甲虫図鑑IV」を出版され、その間渡米されるなど外国の学者と交流を深められたり、東南アジアに出掛けられ、沢山の報文を発表されるなど、その頃が一番油の乗った時代であった。

昭和47年山陽新幹線が開通して、お訪ねするのが楽になった。昭和50年頃には、先生も在職中の大阪城南女子短期大学の家庭科女子生徒を引率されて、毎年の様に来岡された。その時は夕食をご一緒し、標本を見に来られた。

先生は、お手紙の字から想像される様に几帳面で、その上グルメであった。お宅にお伺いすると文献と標本箱の山に囲まれた部屋で、正座された膝の上でコーヒー豆を挽いて煎れて下さるか、香りのいい紅茶にブランデーを入れて出して下さった。お茶を頂きながらその時々のお話を伺ったり、私の職業柄健康の質問をよくされた。

平成2年奥様を亡くされ、子供さんがおられなかったので、全く一人になられた。これからは落ち着いて研究ができると言われていたが...



平成9年5月に、モンクロベニカミキリの調査のため、虫友3人と来岡された。先生と採集をご一緒したのは、この時が最初であった。目的の天牛は時期が既に遅く、それではと言うことで、その頃虫界を賑わしていたヤノコモンタマムシを採りに岡山ネオポリスにご案内した。写真はその時のもので、これが最後の写真になろうとは思もしなかった。

平成10年9月、甲虫学会の例会に初めて先生が欠席され、10月になり幹事が心配している所に訃報が入ったそうである。先生とのお付き合いは半世紀以上に及び、その間言葉に尽くせぬご厚情を賜わったままに終わったのは残念で、もっと長生きをして頂きたかった気持で一杯である。ここに心よりご冥福をお祈りいたします。
(くろだ ゆういち)

(倉敷昆虫同好会誌「すずむし」134号より許可を得て転載)

林 匡夫さんとの45年

生谷義一

昨秋、林匡夫さんが急逝されてから、早くも一周忌を迎えました。今頃は極楽の蓮座の上で、先行の大倉正文さんと虫談に耽って居られることでしょう。ひょっとすると、最近到着された中根猛彦氏の毒舌に閉口して居られるかも知れません。

私は追悼文を自分の虫界交友録の積もりで書こうと思います。謹厳な大倉さんだったら一喝されそうですが、寛容な林さんだったから、苦笑はされても許して頂けることでしょう。

敗戦直後の暗澹とした世情騒然の時期に、近畿甲虫同好会は大倉正文、林匡夫、伊賀正汎、後藤光男、河野洋の諸氏によって設立され、翌1946年1月には早くも近畿甲虫同好会會報の創刊号が発行されています。内容は戸澤信義氏の序文と、最終頁の林さんの『*Eupogonius tenuicornis* BATES 九州に産す』という短報以外は、残りの23頁が大倉正文さんの『大阪付近産アヲゴミムシ属に就いて』という力作です。

林さんはこの後で近畿甲虫同好会の會報の第Ⅱ巻・第5号に江田茂氏との共著とご自身での単著の2報を、更に第Ⅳ巻・第1号に単著でそれぞれ報文を發表されていますが、意外に少ない感じです。当時私は物理的なことに興味がある小学校生で、科学少年ではありましたが(5年生で毎日小学生新

聞社賞を、6年生で大阪市長賞を受賞)、中学校では理科の指導者に恵まれず、ある程度独学でもできる昆虫採集に熱中しました。特に転校してきた吉川正彦君とはライバル意識を持って大いに競争したものです。高校に進学すると、一瞬の中に起こる劇的な化学変化に魅せられ、一転して私は化学に興味を抱きました。化学の教師は私を助手のように扱い、自由に実験をさせてくれました。それでも、私は昆虫採集を辞めはしませんでした。吉川君を通じて長崎東高の神谷(現姓、佐々治)寛之君を知ったのもこの頃でした。ところで、高校生ともなれば、大学の進学問題があります。進学問題では林氏も父親と意見が衝突して到頭進学を放棄して居られますが、私は理科系なら阪大で充分だと言う父親のすすめをあっさり承諾し、東大志望を捨てました。要するに受験勉強を程々にして、昆虫採集がしたかったのです。これは大成功で、当時の大学は一般教養部と専門学部は完全に分離していて、教養時代には専門の講義は有りませんでした。昆虫に熱中する時間が与えられたのです。私は近くに住んで居られた伊賀正汎氏を通じて近畿甲虫同好会に入会し、黒澤良彦氏を通じて日本昆虫学会にも入会しました。大阪市立自然科学博物館の採集会で上野俊一氏を知り、歩行虫を主たる対象とすることを決意しました。林さんとの初対面は、夏休みの最終日曜日に実施される大阪市立自然科学博物館の同定会の席上でした。その時点では既に林さんがカミキリの権威であることは承知していましたが、初対面の印象は非常に庶民的な先生に感じられました。後になってその経歴を知るに至って、成る程そうであったのかと納得した次第でした。

林さんご自身がアマチュアの出身だけあって、後進の指導や一般人の啓蒙活動には、非常にご熱心でした。特に大阪市立自然科学博物館や、関西自然科学研究会の行事には、足繁く参加し指導されました。関西自然科学研究会では、晩年には会長を長期間に互って務められました。林さんの業績を紹介する場合には、研究活動だけでなく、このような普及活動での功績をもっと評価すべきでしょう。私もこれらの行事に何回か参加しましたが、林さんご自身が採集に熱中することなく、常に参加者の指導に努められているのを目の当たりにして、大いに感じ入ったことでした。近畿甲虫同好会(当時)を離れた



場での林さんの普及活動の一面を物語る情景の写真として、昭和36年5月6日に三重大学平倉演習林で実施された関西自然科学研究会でのスナップを紹介しましょう(写真の中央は大町文衛・三重大学教授、右は筒井嘉隆・大阪市立自然科学博物館長)。

日本甲虫学会は近年になって採集会を実施していますが、近畿甲虫同好会の当時は採集会は行われませんでした。その代わり、大倉さんが世話役の神戸昆虫同好会が毎月例会を行っていて、シーズンは採集会、オフシーズンは談話会となっていた。その談話会が初めて拙宅で行われた際、意外にも林さんが早めに来訪されました。当時、私はめぼしいカミキリは全てゴミムシとの交換に充てていて、カミキリのコレクションは貧弱で恐縮しましたが、林さんは丁寧に標本を見て下さいました。私は林さんの気配りに感謝しました。

私は学生時代は昆虫採集に堪能したけれども、勉強を等閑にしたわけではありません。卒論は赤堀四郎教授の許でやろうと入学当時から考えて科目も選択し、それなりの成績を挙げていました。赤堀研究室への配属希望は簡単に聞き入れられましたが、赤堀教授からは「僕のところの助手に草間(慶一)というのがおるんだが、これが昆虫気狂いで困っているんだよ。君も昆虫をやっている

そうだが大丈夫だろうね?」と釘をさされました。博士課程への進学も内定したある日、教授は私に一冊の書物を手渡されました。それは米国で出版されたサンガー教授による核酸についての最新の総説書でした。私はその書籍をむさぼるように読んで興奮しました。これは種の同定に使えると直感したからです。私は次に林さんにお目に掛かった際にそのことを熱っぽく語りました。林さんは黙って最後まで聞いて下さいましたが、何も発言されませんでした。私は限界を感じて、以後はそのことを氏に口にするのはしませんでした。今日DNA分析は日常茶飯事の話ですが、これは40年前の話です。この研究が博士過程でのテーマでしたが、私の大阪学芸大学(現大阪教育大学)への就職で立ち消えとなりました(幾星霜を経てサンガー教授は核酸の研究で再度のノーベル化学賞を受賞されました。私は複雑な気持ちでそのニュースを受けとめたものです)。

その後、野村英世君らのグループと共に、林さんの講義を聴いたことがあります。話題はカミキリの分布に関したものでしたが、林さんの最大の興味がこのあたりにあったのかと悟りました。この頃は氏の研究活動が最も盛んなときで、精力的に研究をされていました。北大から学位を授与されたのが1961年で、私も祝賀会に参加したことを記憶しています。

父親を亡くされてからは、呉服の行商を廃業し、城南女子短期大学の設立に関与して教授に迎えられるました。時間に余裕も生じたものか、時々はお誘いを頂いて食事などを一緒にしました。ただ、話題としては単なる世間話が多くなりました。私の方も段々と雑用が増えてきて、時間の余裕が少なくなり、林さんには日本甲虫学会の大会の席上でご挨拶をして、懇親会でご高説を伺うというパターンになってしまいました。それでも何か大きな行事があるときには私が写真係を担当するということが慣例になり、大倉さんや、林さんの古希の祝賀会の写真も私が担当しました。林さんの古希の祝賀会の写真で私が大きな顔をして前に座っているのもそのような事情からです。

林さんの思い出を綴って来ましたが、林さんが若い同好者に常に理解を示し、機会を与え続けてこられたことを最後に指摘しておきます。日本甲虫学会の運営も完全に若い世代の合議制に受け継がれ、不安は感じられません。林さんも以て瞑すべきでしょう。(いくたによしかず)

故林 匡夫博士を偲んで

楨原 寛

林 匡夫先生のご逝去を知ったのは、亡くなられて数日後の1998年10月11日の夜でした。私は1997年12月末から2年間JICAの長期専門家として、インドネシア、東カリマンタン州マリダ市に滞在中で、斉藤秀生氏の家に入れた時に偶然知らされたのです。

私は現在、こちらのムラワルマン大学のPUSREHUT(熱帯降雨林研究センター)で大学の演習林に棲息しているカミキリムシの図鑑を作っています。欧米であればタイプ標本を比較的簡単に見る事が出来るのですが、ここでは文献だけがたよりです。しかも英語の記載は少なく、ラテン語、ドイツ語、フランス語が大半です。この作業を延々とやっていたときに、林先生のことが思い出されてきました。今、日本は世界で最も図鑑類が揃っている国です。カミキリムシに関しては特に充実しています。そして、このようになるには林先生のご苦労、ご尽力があったからに他ならないとしみじみ感じています。

林先生に最初にお会いしたのは1968年の秋でした。私が初めて台湾に採集に行き、その時の採集品を見ていただくために大阪へ出かけたのです。当時、私は鹿児島大学の学生でまだ、虫のことが全く分かっていなくて、林先生から多くの知らないカミキリムシの名前を教えていただいたのですが、*Pachypidonia*の新種が入っていたのはさすがに驚かれたようでした。その後、鹿児島、福岡から何度

か大阪に足を運び、林先生お得意の自慢話を伺いながら、私の自慢話も聞いていただきました。この頃、林先生は必ず、中華料理を食べに連れて行っ下さったので、私の頭には、比較的脂っこい食べ物がお好きであるという印象がありました。私が1981年に九州大学から、筑波の森林総合研究所(当時、林業試験場)に移ってから、一度、筑波に来られたことがあります。この時は大阪でお世話になったお礼にとよく知っている焼肉屋に行き、牛のホーデンスライスを食べていただきました。意外と気にされずに、よく食べられたのを記憶しています。1980年代前半には林先生と共著でネパールのカミキリムシヤスギノアカネトラカミキリの論文を発表させていただき、色々ご指導を受けていたのですが、最近忙しさにかこつけて連絡もあまりしていませんでした。そして、お身体の具合が悪いと人づてに聞きながもお伺いできずに、インドネシアに来てしまったのです。こちらに来る前に一度、お見まいに伺い、話をお聞きしておけばよかったですと後悔しています。

大変、お世話になりました。ご冥福をお祈りいたします。

(まきはら ひろし)

林先生を偲んで

八木正道

初めて林先生にお会いしたのは、1976年頃と思う。お会いしてすぐに、私の息子等が卒業した北野高校の先輩である事と、同じ船場の商家のご出身である事が分かり、更に親近感を覚えた。

1969年に林先生の「原色日本昆虫生態図鑑 I」が発売され、たちまちカミキリ熱が虫屋の世界に蔓延した。長い間休眠状態であった私は、1971年頃からカミキリ熱に感染した。4月から8月にかけて、毎日曜・祝日・土曜半日に、晴雨に拘らずカミキリの採集にでかけた。「新しい昆虫採集案内 II」によって、1976年から四国・小田深山には3回出かけた。当時はすでに伐採も終り小田深山のブームは終わっていたが、クロサワヘリクロハナ・ゴジマベニスジ・ツチイロフトヒゲ・オオクボ等を採集した。いつも、土曜日の午後(当時土曜日は半ドンだった)伊丹から松山へ飛び、飛行場からタクシーで高知に向かった。久万町でタクシーを乗り換え(町のタクシーは道が悪くて入らない)桶小屋の民宿に宿泊した。翌日は早く宿舎を出発し、柵小屋を経て小田深山で採集した。午後4時頃、柵小屋の先のチェーンの張ってある場所まで久万タクシーに迎えに来てもらい、松山空港に直行し、伊丹行最終便で帰宅した。亡くなったI氏に「八木さんの標本は日本一単価の高い標本だ」と言われた。月刊むし誌上で「72年アマミのカミキリ」の記事が紹介されて、1974年から奄美大島へ、75年から石垣島・宮古島・与那国島へと、毎年ゴールデンウィークに南西諸島へ連続6年間採集に出かけた。

保育社が「原色日本甲虫図鑑 I~IV」の出版を計画され、林先生が生態図鑑に引き続き、カミキリムシの解説を担当される事となった。出来るかぎり新鮮な個体を図版に使いたいとの事で、私に協力を要請された。1982年から83年にかけて図鑑用に普通種を含めてカミキリムシの採集に努め、また虫友に採集を依頼した、図鑑は1984年4月に出版され、多くの種が私の提供した標本によって図版を飾った。

1985年から台湾へ5回、ボルネオ・タイ・スマトラと、何時ものとおりにゴールデンウィークに採集に出かけた。台湾では今まで通過するだけで、人があまり採集しない南部の屏東県寿峠での採集に努め、2新種を発見した。林先生に記載して頂いた台湾のカミキリは収集品を含めて次のとおり。

Cleonaria taiwana HAYASHI, 1984 花蓮県瑞穗温泉

Neocerambyx taiwanensis HAYASHI, 1992 屏東県寿峠

Graphyra sungkangensis HAYASHI, 1992 南投県松崗

Blephaeopsis yagii HAYASHI, 1992 屏東県寿峠

Bumetopia yagii HAYASHI, 1992 台東県緑島
Myagrus yagii HAYASHI, 1994 台中県谷関
Eutetrappa biostata HAYASHI, 1994 南投県獅
 子頭

寿峠の *Neocerambyx* はその後日本人、台湾人によって灯火採集で多数採集されたが、*Blepephaeopsis* はその後探察されたことを聞かない。

その他、日本・印度・バリ島・スンバワ島・チモール島等の9種を記載して頂いた。

私は昨1998年から仕事を定年とすることにした。林先生は前から毎年台湾に行かれてお元気の様子なので、今まで年数回だったものが、度々伺うことができると期待していた。ところが、私は4月に採集に出かけた時に、滑って向こう脛を骨折した。3ヵ月半の入院生活から自宅に戻って、杖を頼りに療養生活を送っていた。と、突然林先生の訃報の連絡が入った。前年11月に林先生宅に伺った時に、私が研究用にお預けしている標本を返還したいが、リストがあるかと言われた。死を予感されての事だったのだろうか。突然のお話であり、日頃お世話になっている先生に目の前で返して頂きたいと言えないので、私の標本には番号入の黄色のラベルが採集ラベルの下に付いているので、すぐわかりますと申し上げた。亡くなられてから、林先生の標本・文献等は自宅の部屋を明渡す関係上、早々に大阪市立自然史博物館に搬入されたが、私の標本は、林先生のご遺志に沿って、殆んど全部の返還をうけた。

日本にカミキリブームを興された林先生が、こんなに早くお亡くなりになられるとは思ってもやらず、非常に残念でならない。心よりご冥福をお祈り申し上げます。(やぎ まさみち)

(追悼文は次号にも続きます。)



日本産タマキノコムシ科 *Anisotoma* 属メモリアル

保科英人

〒812-8581 福岡市東区箱崎 6-10-1 九州大学農学部昆虫学教室

日本産タマキノコムシ科 *Anisotoma* 属(和名新称:クシヒゲタマキノコムシ属)は、現在12種が知られている。このグループは俗な言い方をすれば、「北方系」と呼ばれる一群である。統計学的な裏付けはないが、誤解を恐れずに言わせてもらうならば、日本国内では、北海道のような北の地域では頻りに採集されるが、南へ下るほど採りにくい傾向がある。事実、琉球からは1種たりとも記録がない(HOSHINA, 1998a)。また、昨今の東南アジアでのタマキノコムシの記載状況を見ても、怒涛のごとく記載されている *Agathidium* (マルタマキノコムシ属)に比して、クシヒゲタマキノコムシ属の記載される種数は極端に少ない。今でもぼつぼつと報告されている中国大陆を除けば、世界のクシヒゲタマキノコムシ属はあらかた出尽くした感否めない。

さて、日本におけるクシヒゲタマキノコムシの研究の経過を辿ってみると、PORTEVIN (1908; 1914; 1927)の段階で、既に8種が報告されている。1927年と言えば、昭和2年だ。台湾銀行・鈴木商店が経営破綻し、経済恐慌による企業の倒産があいつぎ、近代日本が迷走するなかで、たかが4-5ミリに

すぎない日本産 *Anisotoma* 属 の分類学的基礎は既に固まっていたわけである。PORTEVIN の研究後、HISAMATSU (1985) が約 60年ぶりに 1新種を記載し、さらに ANGELINI & DE MARZO (1988) と ŠVEC (1992) が 1新種ずつ追加した。そして、近年小生が、*Anisotoma orbicularis* を北海道より初記録し (HOSHINA, 1998b), その結果、日本産クシヒゲタマキノコムシ属は、12種となったわけである。このうち、保育社の甲虫図鑑では、半分の 6種が扱われている。実際のところ、普通に採集されるクシヒゲタマキノコムシ属は、この甲虫図鑑に載っている 6種で、おおよそ網羅される。

保育社の甲虫図鑑が、日本の甲虫入門書として広く使用されていることは、周知の事実である。それだけにその影響の大きさは推してはかるべしであり、ほんの一部の同定間違いも永く踏襲され続けることとなる。実は、甲虫図鑑で扱われている 1種のクシヒゲタマキノコムシに同定間違いではないかと思われるものがある。よって、著者が同定を頼まれたとき、というよりは無理にお願いして標本を見させていただいていると言った方が正解であろうが、「これこれの種は甲虫図鑑ではこうなっているが、私はこう思っている」という趣旨の文章を添えて同定リストを送ることになる。さすがに、このような事態が続くと、いきおい一度公式に自分の考えを示したほうがよからうという結論に達した。

前述のとおり、日本産クシヒゲタマキノコムシは 12種である。いずれしかるべき機会を捉えて、全 12種を扱った概説を紹介したいと考えている。しかるにシノニムとなりそうな種や、真に日本に分布するか怪しい種も一部含まれている。逆に、現在のところ、著者の得ている情報や、手持ちの標本からは新種ないしは新記録と思われるクシヒゲタマキノコムシはない。つまり、日本産種数は、減ることはあっても増える可能性はないように思える。いずれにせよ、日本産種数は流動的であるので、今回は、甲虫図鑑上で同定間違いと思われる 1

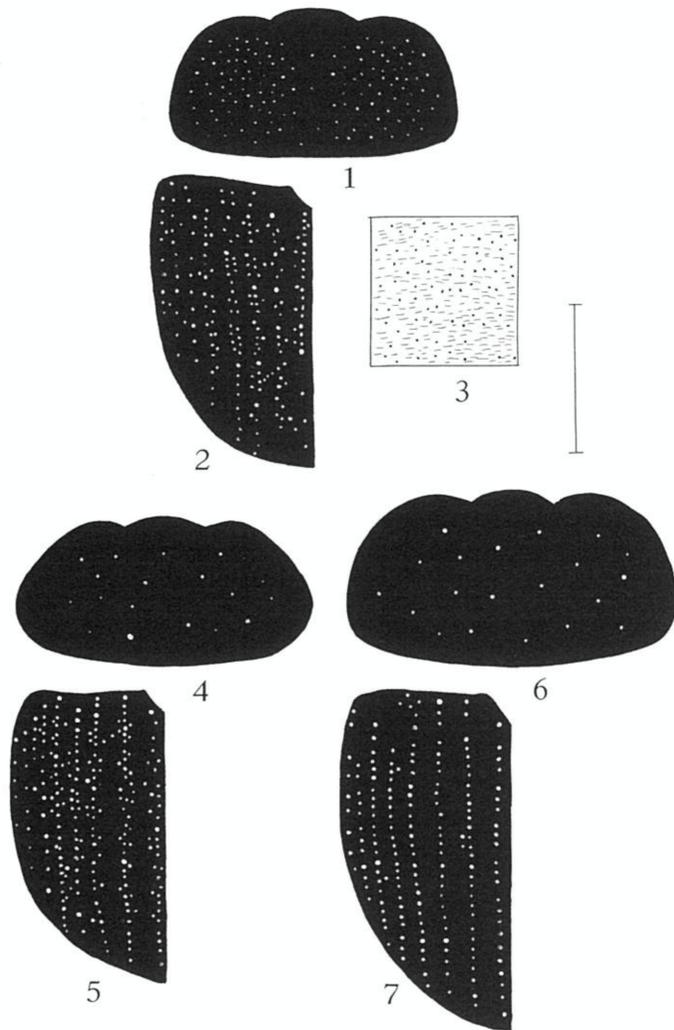


図1-7. 1, 4, 6. 前胸背板; 2, 5, 7. 左上翅; 3. 前胸背板拡大図. 1-3. *Anisotoma didymata*; 4-5. *A. frontalis*; 6-7. *A. annae*. 縮尺: 1 mm (3を除く)

種と、それに関する 2 種の区別点について記述することにする。以下、今回扱う 3 種を列記する。

Anisotoma didymata (PORTEVIN, 1927) 和名新称：オビスジクシヒゲタマキノコムシ (図 1-3, 8)

分布：北海道・本州・四国・九州・対馬

従来の和名は、オビスジタマキノコムシであったが、*Anisotoma* 属の和名をクシヒゲタマキノコムシと指定したため、和名に「クシヒゲ」を挿入した。また、分布に示した北海道は、甲虫図鑑には記されていないが、今回分布地域として報告する。北海道における採集データは次のとおり。

3 exs., 北海道雄阿寒岳, 13. VII. 1995, 著者採集

Anisotoma frontalis (PORTEVIN, 1927) 和名新称：コゲチャクシヒゲタマキノコムシ (図 4-5, 9)

分布：本州・四国・九州

詳細は後述するが、今回扱う本種は、甲虫図鑑で説明されている *Anisotoma frontalis* とは別物である。よって、和名は新たに指定した。

Anisotoma annae ŠVEC, 1992 和名新称：ズモンクシヒゲタマキノコムシ (図 6-7, 10)

分布：北海道・四国・九州

詳細は後述するが、本種が甲虫図鑑の「ズモンタマキノコムシ」と一致すると思われる。よって本種の和名は、*Anisotoma frontalis* の従来の和名に「クシヒゲ」を挿入したものである。模式産地は謎である。原記載には、JAPAN, NUNAT, IV. 1910 としかない (原記載には、模式標本は東欧チェコスロバキア (現チェコ)・国立プラハ博物館所蔵とされている)。

さっぱりわからない。よって、上記の分布地域は、すべて著者が今までに調べた標本に基づく。著者は、未だ本州産の標本を検査する機会に恵まれないが、本種が本州に分布するのは確実であろう。なお、採集データは次のとおり。

2 exs., 北海道札幌市野幌, 21. VII. 1986, 大原昌宏博士採集

3 exs., 徳島県剣山, 24-28. III. 1962, K. MORI 採集

6 exs., 宮崎県白岩山, 26-28. VII. 1996, 上野輝久氏採集

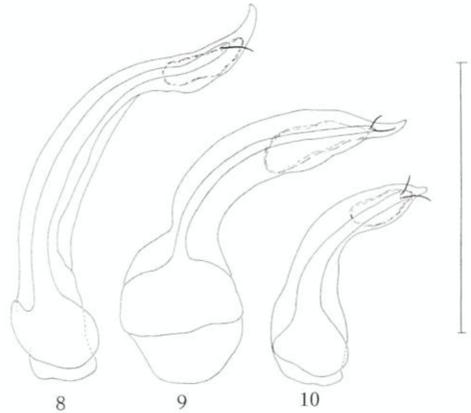


図8-10：雄交尾器。8. *Anisotoma didymata*；9. *A. frontalis*；10. *A. annae*。(縮尺：1mm)

著者が、甲虫図鑑の *Anisotoma frontalis* ズモンタマキノコムシに対し疑念を抱いたのは ANGELINI & DE MARZO (1988) の論文を見たときのことである。本論文で描かれている *A. frontalis* の雄交尾器の図と、甲虫図鑑の知見に基づいて同定した *A. frontalis* の雄交尾器が一致しないことに気付くのに多大な時間は要しなかった。そして、甲虫図鑑の示すところの *A. frontalis* の雄交尾器は、ŠVEC (1992) の記載した *A. annae* の雄交尾器の図と同一であったのである。ここに、*A. frontalis* に関して、両立しえない二つの見識が明らかになったのである。本来ならば、*A. frontalis* と *A. annae* の 2 種の模式標本を検査することが必須であろうが、取りあえずパリの自然史博物館に保管されている *A. frontalis* の模式標本を調べてみた。この模式標本は、図 5 のような上翅に乱れた点刻列を持っており、明らかに ANGELINI & DE MARZO (1988) の言う *A. frontalis* であった。これすなわち、久松定成先生には大変申し上げ難きことながら、甲虫図鑑の *A. frontalis* とは別物である。実は著者は以前、この知見を久松先生にはお話してある。*A. frontalis* についての著者の考えは以上のとおりである。そして、甲虫図鑑の「上翅の点刻列は.....単純」「頭楯前縁に 3 微突起」という形質の記述は、ŠVEC (1992) の記載した *A. annae* のそれと全く一致するものである。

A. frontalis と *A. annae* は、上翅の点刻列が乱れるか、整然とするかで容易に見分けることができる(図2と7)。日本には、*A. curta* (PORTEVIN, 1927) という、上翅に整然とした点刻列を有する種が存在するが、*A. annae* とは体型等で容易に区別できる。今回は、*A. curta* に関しては詳しく述べない。ではここで、「上翅に乱れた点刻列を有する」*A. frontalis* と *A. didymata* の両種を(図2と5)、どのように区別するかが問題になる。それらを次に述べたい。

まず第一は、著者個人の勝手な経験に基づく、非学問的な区別点である。北日本ではいざしらず、西日本では *A. didymata* は稀少であると思われるので、「黒っぽくて、乱れた点刻列を有する上翅」であれば、7割がた *A. frontalis* であると考えてよい。

第二に、前述の雄交尾器である。実のところ、雄交尾器を検すれば、両者の差は一目瞭然である(図8と9)。交尾器をもって比するのであれば、差をぐだぐだと述べる必要はなからう。

第三として、前胸背板の輪郭が挙げられる(図1と4)。*A. didymata* の前胸背板が台形に近い形であるのに対して、*A. frontalis* のそれは肉まんを横から見たような形である(ボキャブラリーが貧困か?)。但し、標本の置き具合によって、背側から観察した輪郭は変化するので、この形質に頼りすぎるのは危険を伴う。第四に、前胸背板の点刻の密度である。図1と4に示したとおり、*A. didymata* の方が、多くの微小点刻を有する。但し、点刻の状態は、個体変異が大きいので、やはりこの形質に頼りすぎるのは危険を伴う。

最後に、前胸背板が、繊細な彫刻状の細溝を備えるか否かである。図3は *A. didymata* の前胸背板の拡大図である。*A. didymata* には、横方向の彫刻状の細溝があるが、*A. frontalis* にはない。この形質は、雌雄関係なく使えるので、便利ではある。しかし、この細溝はそこそこの性能を持つ顕微鏡でないと観察しにくく、また標本状態によっても観察しにくいことがある。また、一度検していないと、何が細溝なのかかわかりにくい。そこで、まず両者の雄交尾器をもって同定した標本で、この彫刻状の細溝があるかどうかを比較観察するとよい。そうすれば、二回目以降は、解剖して雄交尾器を観察しなくても、両者を区別することができよう。

日本産クシヒゲタマキノコムシ属は、新種が出る可能性も低いので、タマキノコムシ亜科のなかでは、雄交尾器を取り出さなくても何とか同定できる。また、クシヒゲタマキノコムシは、多くの種が落葉中に生息する *Agathidium* (マルタマキノコムシ属) と異なり、キノコや倒木上の菌類から、ピーティングで採集される。採集方法が普通であるので、タマキノコムシなんぞに興味を持たれない虫屋の方々も採集できる。よって、著者のように、朝から晩まで顕微鏡の下で、タマキノコムシを転がして遊んでいなくても、多数の人がクシヒゲタマキノコムシを種まで同定できる概説を、しかるべき和文ニュースレターにいずれ発表したいと思う。

末筆ながら、北海道産のタマキノコムシの標本を見る機会を与えてくださった、北海道大学農学部昆虫体系学教室の大原昌宏先生と丸山宗利氏、そして著者の研究全般に御助言をいただいている久松定成先生に、厚く御礼申し上げます。

参考文献

- ANGELINI, F. and DE MARZO, L. 1988. Anistomini del Giappone (Coleoptera, Leiodidae). Ent., Bari, 23: 47-122.
 久松定成, 1985. 上野俊一他編 原色日本甲虫図鑑, 2: 233-237, PL. 42, 保育社。
 HISAMATSU, S. 1985. Notes on some Japanese Coleoptera, I. Trans. Shikoku ent. Soc., 17: 5-13.
 HOSHINA, H., 1998a. A taxonomic study of the tribe Agathidiini (Coleoptera: Leiodidae) from the Ryukyus, Japan. Jap. J. syst. Ent., 4: 137-159.
 HOSHINA, H. 1998b. A first record of *Anisotoma orbicularis* (HERBST, 1792) (Coleoptera: Leiodidae) from Japan. Ent. Rev. Japan, 53: 8.
 PORTEVIN, G. 1908. Quatrième note sur les Nécropages du Muséum. Bull. Mus. natn. Hist. nat., Paris, 1908: 19-29.
 PORTEVIN, G. 1914. Revision des Silphides, Liodides et Clambides du Japon. Ann. Soc. ent. Belg., 58: 212-236.
 PORTEVIN, G. 1927. Les Liodidae du Japon. Encycl. Ent. Coleopt., 2: 73-94.
 ŠVEC, Z. 1992. In two palaeartic *Anisotoma* (Coleoptera, Leiodidae). Annot. Zool. Bot., 209: 1-5. (ほしな ひでと)

大阪府におけるメクラチビゴミムシ類の記録
 Records of Anophthalmic Trechine Beetles from Osaka Prefecture,
 Central Japan

北山健司

〒570-0034 守口市西郷通4-13,8-210

芦田 久

〒616-8182 京都市右京区太秦北路町8-3-406

オサムシ科チビゴミムシ亜科に属する甲虫は、日本からは2族30属、300種以上が記載されている。これらの中には複眼や後翅を有する地表性の種も含まれるが、大部分の種は複眼、後翅ともに退化し洞窟や地下浅層から見いだされる、いわゆるメクラチビゴミムシである。大阪府からも、現在までに2属7種のメクラチビゴミムシ類が記載されているが、一般には人目につきにくい昆虫であるため、その後の記録はほとんどみられない。

筆者らは近年、このグループに興味を持ち、大阪府を中心に調査を行ってきた。その結果、既知種7種の追加標本に加え、大阪府初記録となる3種1亜種の標本を得ることができたので、ここに報告する。

本稿をまとめるにあたり、採集地情報等で多大な助言をいただいた山下俊一氏、調査に協力され採集データを提供していただいた斎藤琢巳、森正人、北山昭の各氏に深く感謝の意を表する。

01. *Trechiana nagahinis* S.UÉNO, 1976 ミノオメクラチビゴミムシ (写真1)

文献記録：箕面 KABAYA谷のマンガン廃坑(170m) [3], 高山道(340m) [3], 政の茶屋のダム試掘坑 [4].

採集記録：4♀♀, 箕面市政の茶屋付近(350m), 18.X.1997, 北山採集；5♂♂, 同地(350m), 26.X.1997, 芦田・北山採集；1♂, 同地(380m), 21.XII.1997, 北山採集；1ex., 箕面市清水谷(390m), 28.VI.1998, 山下採集；1ex., 同地(390m), 5.VII.1998, 山下採集；1ex., 同地(390m), 25.VII.1998, 山下採集；1♂2♀♀, 同地(390m), 8.VIII.1998, 北山採集；4♂♂3♀♀, 同地(390m), 13.IX.1998, 北山・北山(昭)採集；1ex., 箕面市箕面川ダム東の谷, 5.X.1998, 山下採集；2♂♂2♀♀, 箕面市箕面川ダム上流(400m), 5.IX.1998, 森採集；1♂, 能勢町野間口(470m), 6.VI.1998, 森採集。

大阪府で初めて採集されたメクラチビゴミムシである。1955年、YOSHIKAWAにより大きな石の下から1頭の*Trechiana* が採集されたが、雌であったうへ破損していたため記載は見送られた。1975年に最初の記録地から7km離れたマンガン廃坑で数頭の標本が得られたため、1976年によりよく記載された。種名は本種の発見に関わったTOMI-NAGA, YOSHI-KAWA, NISHIKAWAの3氏から取って付けられたものである。その後ダムの試掘坑でまとまった数の標本が得られたが、地下浅層からは最初の1頭以来得られていなかった。今回、筆者らはすべて地下浅層から採集した。水が伏流した涸れ沢の土砂中の、水が浸みだしてくるあたりの層から得られることが多いが、個体数は少ない。

02. *Trechiana parvus* S.UÉNO, 1980 ポンポンメクラチビゴミムシ (写真2)

文献記録：茨木市車作 竜仙峡(130~160m) [4].

採集記録：8exs., 茨木市竜仙峡(220m), 2.V.1998, 山下採集；1♂, 同地(220m), 16.V.1998, 北

山採集；1ex., 同地 (220m), 22.VIII.1998, 北山採集；3♂♂, 茨木市竜王山東麓 (280m), 14.III.1999, 芦田採集；1♀, 高槻市二料, 12.X.1998, 北山(昭)採集.

大阪・京都府境の京都府側に位置するポンポン山がタイプ産地であるが, 大阪府からも同時に記録されている. ミノオよりは浅い層から出ることが多い.

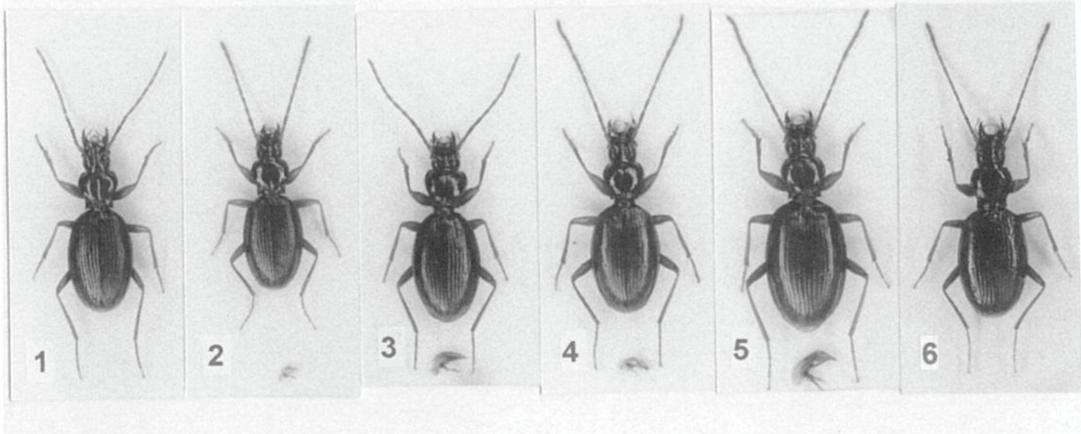


写真1-6：1. *Trechiana nagahinis*；2. *T. parvus*；3. *T. inexpectatus*；4. *T. dissitus*；5. *T. notoi*；6. *T. sp.*

03. *Trechiana inexpectatus* S.UÉNO, 1980 サクライメクラチビゴミムシ (写真3)

文献記録：島本町桜井 中谷 (100~120m)[4].

採集記録：1♂, 島本町桜井 (110m), 17.I.1998, 北山採集；1♂, 同地 (160m), 25.VII.1998, 北山採集.

ヨシイメクラチビゴミムシ群に含まれるが, 特異な上翅剛毛式を有するため, 他の種類からは一見して区別できる. 今回得られた場所は, タイプ産地とほぼ同じ地点であると思われる.

04. *Trechiana dissitus* S.UÉNO, 1984 イズミメクラチビゴミムシ (写真4)

文献記録：泉佐野市犬鳴山 (360m) [7, 8].

採集記録：3♂♂8♀♀, 泉佐野市犬鳴山(370m), 3.X.1998, 北山採集；1♀, 同地(400m), 31.X.1998, 森採集, 2♂♂2♀♀, 同地(370m), 3.XI.1998, 北山・芦田採集；1♀, 同地(370m), 13.III.1999, 北山採集.

中国地方や四国東北部に分布の中心を持つオニメクラチビゴミムシ群に属するが, その中のコスゲメクラチビゴミムシ系に含まれる. コスゲ系の他の種類は, 京都府西北部から兵庫県東部にかけて記録されており, 本種だけが飛び離れた分布を示す. 潤れ沢の地下浅層より得られた.

05. *Trechiana notoi* S.UÉNO, 1981 ノトメクラチビゴミムシ (写真5)

文献記録：能勢町山田田野 豊能坑 (マンガン廃坑) (400m) [6, 8].

採集記録：1♀, 能勢町山田 山田川源流部 (430m), 8.VIII.1998, 北山採集；2♂♂, 能勢町山田田野川源流部 (400m), 9.VIII.1998, 山下採集；3♂♂2♀♀, 同地 (420m), 15.VIII.1998, 北山・芦田採集；1♂, 同地 (420m), 19.XII.1998, 北山採集；2♂♂3♀♀, 能勢町山田豊能坑上の穴, 27.II.1999, 北山(昭)・森・西川喜朗採集.

巨大な雄交尾器に, 先端部が常時露出するほどの長大な交尾片を内蔵する顕著な種類である. 最

後に示した記録以外はすべて地下浅層からの採集例であるが、洞穴以外からは初めての記録となる。

06. *Trechiana* sp. カダメクラチビゴミムシ (仮称) (写真6)

採集記録：1♀，岬町多奈川(100m)，21.II.1999，芦田採集。

隣接する和歌山市側で発見されている未記載種と同種と思われる。本種もオニ種群に属するが、讃岐山地と諭鶴羽山地に分布するサトウメクラチビゴミムシ系に属する点で、イズミとは大きく異なる。地下浅層より得られた。

07-1. *Stygiotrechus morimotoi morimotoi* S.UÉNO, 1973 モリモトメクラチビゴミムシ (写真7)

文献記録：茨木市石堂ヶ岡(420-510m)。

採集記録：3exs.，箕面市政の茶屋付近(350m)，25.X.1997，北山採集；1♀，同地(350m)，26.X.1999，芦田採集；5exs.，同地(320m)，26.IV.1998，北山採集；1ex.，同地(320m)，16.V.1998，北山採集，2exs.，同地(320m)，27.IX.1998，北山・北山(昭)採集；1ex.，同地(320m)，24.X.1998，北山採集；9♂♂3♀♀，同地(320m)，4.I.1999，芦田・北山・山下採集；1♂1♀，茨木市石堂ヶ岡(600m)，30.I.1999，山下採集；1♂1♀，同地(600m)，31.I.1999，北山採集；3♂♂1♀，同地(400m)，14.III.1999，芦田採集。

箕面で採集された*Trechiana*の一種(後にミノオメクラチビゴミとして記載)の追加標本を得るための探索の過程で発見され、ミノオに先だって1973年に記載された。両肩に大きな一本の突起を有する顕著な種類である。

政の茶屋はタイプ産地から3.5 km南西に位置する。この個体は、原記載の図と比較すると雄交尾器の中央片がやや長いように思われるが、微妙な差異であるので、本亜種に含めるものとする。

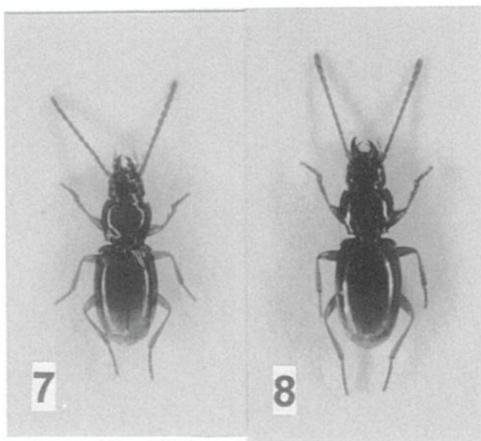


写真7-8：7. *Stygiotrechus morimotoi morimotoi*；
8. *Stygiotrechus* sp.1.

07-2. *Stygiotrechus morimotoi notarum* S.UÉNO, 1980

イズリハメクラチビゴミムシ

採集記録：1♂，高槻市出灰～中畑(360m)，4.V.1998，芦田採集；1♀，同地(360m)，5.V.1998，北山採集；4♂♂1♀，同地(360m)，20.XII.1998；北山・芦田採集。

ポンポン山の南西麓(京都府)がタイプ産地[5]であるが、今回はここから1.5km北の地点で採集できた。大阪府からは初記録となる。

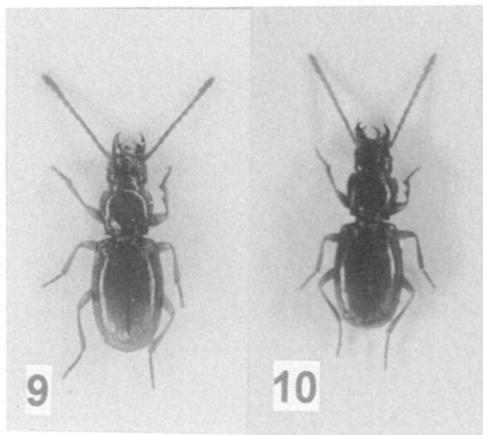


写真9-10：9. *S. ohtanii*；10. *Stygiotrechus* sp.2.

08. *Stygiotrechus* sp.1 (写真8)

採集記録：1♂2♀♀，岬町多奈川(100m)，21.II.1999，芦田採集。

06. の*Trechiana* sp.と同じ沢で得られた。これも、

はじめ隣接する和歌山市側で見いだされたものである。両肩に一本の突起を有しモリモトに近似するが、体型や雄交尾器は大きく異なる別種である。

09. *Stygiotrechus ohtanii* S.UÉNO, 1969 コンゴウメクラチビゴミムシ (写真9)
文献記録：金剛山(1000m) [1].
採集記録：8♂♂7♀♀, 千早赤阪村金剛山(930m), 10.X.1998, 芦田・北山・斎藤採集。
大阪府から最初に記載されたメクラチビゴミムシである。モリモトメクラチビゴミムシとは異なり、両肩は鋸歯状となる。本種は雌のみの標本で記載されたが、今回初めて雄が得られた。

10. *Stygiotrechus* sp. 2 イズナキメクラチビゴミムシ (仮称) (写真10)
採集記録：1♀, 泉佐野市犬鳴山(370m), 7.V.1998, 北山採集；4exs.(テネラル), 同地(370m), 3.X.1998, 北山採集；32exs., 同地(370m), 3.XI.1998, 北山・芦田採集；2exs., 同地(370m), 17.I.1999, 北山・芦田採集；1♀, 同地(370m), 13.III.1999, 北山採集；6exs., 同地(370m), 11.IV.1999, 山下採集。
コンゴウに近い種類であるが、雄交尾器の構造には明らかな違いが認められる。イズミが採集された沢とは別の沢で得られた。

参考文献

- UÉNO, S.-I., 1969., Bull. natn. Sci. Mus., Tokyo, 12: 485-515.;
1973., Ibid., 16: 23-30.; 1980., Ibid., 6: 195-274.; 1981., Ibid., 7: 79-85.; 1976., J. speleol. Soc. Japan, 1: 1-7.; 1980., Ibid., 5: 1-12.;
1984., Ibid., 9: 5-13.; 1985., Mem. natn. Sci. Mus., Tokyo, (18): 163-198.



図. 大阪府のメクラチビゴミムシ：

○, *Trechiana* spp.; △, *Stygiotrechus* spp.

1. *Trechiana nagahinis*; 2. *T. parvus*; 3. *T. inexpectatus*; 4. *T. dissitus*;
5. *T. notoi*; 6. *Trechiana* sp.; 7-1. *Stygiotrechus morimotoi morimotoi*;
7-2. *S. morimotoi notarum*; 8. *Stygiotrechus* sp.1; 9. *S. ohtanii*;
10. *S. sp.2*.

(きたやま けんじ, あしだ ひさし)

ヒラタコメツキモドキの岐阜県の記録

生川展行

〒513-0015 鈴鹿市木田町2399

Xenoscelinus hiranoi SASAJI ヒラタコメツキモドキは、神奈川県三浦富士と福岡県宝満山で得られた個体を基に1989年に記載された種である。その後八丈島、屋久島、沖縄島、石垣島、西表島、与那国島で記録されているが、本州では神奈川県以外の記録はないようである。

筆者は、今回岐阜県で採集された標本を譲り受けたので、報告しておく。

なお、貴重な標本を恵与された天春明吉氏、標本写真を撮影していただいた稲垣政志氏に、心よりお礼申し上げる。

岐阜県本巣郡本巣町日当, 1ex., 1.VIII.1999, 天春明吉採集, 筆者保管。

灯火に飛来した個体が得られた。

文献

平野幸彦(1990)ヒラタコメツキモドキ八丈島に産す。月刊むし, (233):41.

平野幸彦(1990)ヒラタコメツキモドキの分布など。月刊むし, (298):24-25.

SASAJI,H.(1989)Discovery of the Curious Beetle Genus *Xenoscelinus* Grouvelle (Languriidae-Cryptophilinae) from Japan. Kanagawa Chuho, (90):223-228.

上野輝久(1993)落葉層のヒラタムシ上科・ゴミムシダマシ上科。昆虫と自然, 28(2):11-18.



ヒラタコメツキモドキ

(なるかわ のぶゆき)

ザクセン州立ドレスデン動物学博物館を訪ねて(上)

初宿成彦

〒546-0034 大阪市東住吉区长居公園1-23 大阪市立自然史博物館・昆虫研究室

1999年2月21日から3月28日まで5週間にわたり、ヨーロッパを訪れる機会を得た。これは「東アジアのハナノミ科における属の再検討」という研究課題で、東京の藤原ナチュラリヒストリー振興財団へ助成申請していた研究費が採択されたことがきっかけとなっている。筆者の所属する大阪市教育委員会からも正式に海外出張の許可を得て、ヨーロッパの3博物館、すなわちロンドン自然史博物館(イギリス)、パリ国立自然史博物館(フランス)、およびザクセン州立ドレスデン動物学博物館(ドイツ)を訪れた。

ロンドンにG. LEWIS、パリにM. PICのコレクションの検討が目的であったが、この2館は世界でも屈指の大規模館であり、日本人研究者による訪問記の類も記されているようなので、本稿では敢えて、ドレスデン動物学博物館に絞った形で紹介することにする。

ザクセン州ドレスデン市



写真1. ドレスデン市街地

ドレスデン市はドイツ南東部にあるザクセン州の州都である。人口は50万人弱で、旧東ドイツではベルリン、ライプツィヒに次ぐ大きな街となっている。チェコ国内に源を發し、ハンブルクの西で北海にそそぐエルベ川に古くから栄えた街で、歴史は12世紀にまでさかのぼり、ザクセン王国の首都として永く繁栄してきた。とくにバロック建築群で有名で、「エルベ川のフィレンツェ」の異名を持ち、国内外の数々の芸術家を魅了する街並みを誇っていた(写真1)。

たいへん残念なことに、これらの歴史的建築物は1945年2月に連合軍軍によって行われた空襲により、ほぼ一夜にして壊滅的に破壊されてしまった。エルベ川のほとりにあるたくさんの塔は、一部を除

いて第二次大戦後に再建されたものである。市中心部にあるレジデンツ宮殿などは後世に戦争の悲惨さを伝えるために永く瓦礫の状態で置かれてあったが、最近、特に東西ドイツの統一以後になって再建の作業が急ピッチで始まっている。駅前近くには旧東ドイツ時代を偲ばせる不愛想な建物も少なからず残っているが、目抜き通りのプラガー通り周辺には、アメリカ系のファーストフード店やパリ・ブランドのブティックなども多く目につくようになってきている。

ドレスデン動物学博物館 戦火の歴史

ザクセン州立ドレスデン動物学博物館 (Staatliches Museum fuer Tierkunde, Dresden) は 1728年、ザクセン国王アウグスト 1世の時代に、それまでに収集されてきた美術品や博物標本などのうち、自然史部分を独立させ、ツィンガー宮殿に展示場を開いたことに始まる。コレクションそのものは 1560年に始まったものを源流としており、たいへん歴史の長い博物館である。

この博物館は不幸なことに 2度にわたる戦火に遭っている。1度目は 1849年 5月に起こった戦火 (ドレスデンの五月革命) で、この時には鳥のコレクションなど一部を除いて、ほとんどを焼失してしまった。しかしその後、1900年代にかけて再びコレクションが集められるようになっていった。

2度目の戦火は第二次大戦である。前述の通り、この大戦末期の 1945年にドレスデンの市街地は連合軍の大規模な空襲を受け、一夜にして壊滅的な被害を受けた。博物館のごく一部のコレクションだけは空襲を避けて予めスタッフの自宅などに疎開してあったものの、建物も大部分のコレクションも跡形もないほどの壊滅的なダメージを受けてしまったという。

東西ドイツ分裂後の社会主義経済下においても博物館は存続し、地元ザクセン州の研究者らからコレクションの寄贈を受けるなど、コレクションは順調に増加していった。しかし、建物は依然古いままで、容量的には限界に来ていた。このときに 1989年のベルリンの壁崩壊、東西ドイツ統一を迎えた。

1999年 2月、博物館は展示部門を市の中心部に残したままで、研究部門をドレスデン中心部の小さく古い建物から Koenigswald (王様の森) と呼ばれる北郊の新しい建物に移した (写真 2)。筆者の訪問は 3月のことだったので、ちょうど引越直後の後かたづけも済まない状況の中でお邪魔する形になった。(つづく)



写真 2. ドレスデン動物学博物館

(しやけ しげひこ)

虫屋の広場 (24) [新刊紹介]

◎釧路昆虫同好会(1999), 「道東の昆虫」(釧路新書24, 釧路市), 290pp.4col.pll.

近畿に生活する編集子には、あこがれの虫たちの楽園というイメージの北海道であるが、昆虫相解明の始まったばかりの道東地域ですら本書によれば環境破壊が楽観を許さない状況であるらしい。甲虫に関しては、芳賀 馨、伊藤勝彦らの諸氏が健筆をふるっておられる。

蝶、トンボなど大型昆虫の記述に比較して甲虫の占める頁数は多くないが、地域理解のため一読をお勧めしたい。

(水野弘造)

会 報

10月例会(1999年)の報告

1999年10月24日(日)、大阪市立自然史博物館に於いて開催された。午前中は自由懇談で、午後より会務報告の後、高橋 敏氏(京都女子大)による「奈良公園の甲虫相—隣接京都ファウナとの比較—」と題しての講演があった。多数の春日山の甲虫のカラーズライドによる解説があり、最後にまとめとして、京都のファウナとの比較検討が述べられた。その後の恒例の一人一話では、ほとんどの参加者が春日山の甲虫にふれ、和気あいあいの例会となった。散会后、有志によって天王寺の中華料理店『阿里山』で懇親会が持たれた由である。

秋田勝己 春木 實 春沢圭太郎 林 靖彦 伊藤 昇 伊藤建夫 河上康子 松原 豊 松田吉弘 水野弘造 生川展行
野村英世 大石久志 奥田好秀 初宿成彦 高橋 敏 八木正道 吉田正隆 [出席者(アルファベット順)] (伊藤建夫)

会費納入のお願い

本学会の会費は前納制です。自身の会費納入状況は封筒の宛名の下に記入してあります。2000年度(第55巻分)会費5000円を未納の方には振替用紙を同封させていただきましたので、早急にお納め下さい。また従来発行していましたが領収書(会員証)は事務処理の軽減と経費節約のため今後は発行しませんが、必要な方はその旨御連絡下さい。したがって、振替用紙の控は領収書として保存願います。会費について何か不明な点がありましたら、会計(野村英世)まで御連絡下さい。(野村英世)

発行：1999.12.15 日本甲虫学会
(本部) 〒546-0034 大阪市東住吉区长居公園1-23 大阪市立自然史博物館・昆虫研究室気付
振替口座: 00990-8-39672 URL: <http://www.mus-nh.city.osaka.jp/jcs.html>
Tel: 06-6697-6221 Fax: 06-6697-6225 E-mail: shiyake@mus-nh.city.osaka.jp
昆虫学評論原稿送付先(英文)
〒666-0116 川西市水明台3-1-73 林 靖彦 Tel. 0727-93-3712
E-mail: hayashiy@silver.ocn.ne.jp
ねじればね原稿送付先(和文, E-mailでの投稿を歓迎します)
〒611-0002 宇治市木幡熊小路19-35 水野弘造 Tel.(Fax) 0774-32-4929
E-mail: kzmizuno@oak.ocn.ne.jp
〒614-8371 八幡市男山雄徳8 E7-303 伊藤建夫 Tel.(Fax) 075-983-3491
E-mail: itokyoto@gb3.so-net.ne.jp
入会及び会費問合せ先(年会費5,000円, 入会金は不要)
〒590-0144 堺市赤坂台1-18-5 野村英世 Tel. 0722-98-4066